

長崎県内で最古かつ最大の前方後円墳 守山大塚古墳の調査報告書を読んで

はじめに

標題の報告書『守山大塚古墳Ⅱ』雲仙市文化財調査報告書第 21 集が先月中旬に刊行された。簡潔に感想を述べるならば、「古墳好きには、たまらない報告書」の一言に尽きる。

報告書の構成は、前半が雲仙市教委生涯学習課の辻田直人氏による同古墳の調査履歴と今回の地下レーダ探査と三次元地形測量の委託業者による調査結果の報告で、後半は諫早市文化振興課の野澤哲朗氏の考察、ならびに雲仙市教委生涯学習課の村子晴奈氏の附編からなる。

特に前半の地下レーダ探査の結果は未知なる同古墳の実像への想像を掻きたて、後半の野澤氏の考察は、筆者が知る限り、本県古墳の発掘調査報告書や論文の中では最も精緻で、かつ刺激的な内容である。

拙稿では、報告書の章立てを記載した後に随時内容を要約し、筆者の感想を披歴する形で記述していくが、報告書を直接読んだ際に覚えた知的興奮は到底再現できるものではない。したがって、古墳好きの方はなおさら、そうでない方もぜひ、この報告書を手にとって読んでいただきたい。

本論に入る前に同古墳の現状を写真で紹介しておく（第 1 図）。近世以来、墓地として利用され、墓石が林立する状況である。発掘調査が困難であることを逆手に取って、非破壊の方法で、同古墳の謎に挑んだのが今回の調査と言えよう。実に快挙である。



第 1 図 守山大塚古墳の現状（雲仙市教委編 2025）

1 章立て ならびに内容の要約と感想

第1章 調査の経緯（辻田）

【要約】 同古墳の調査歴が記載されている。

第2章 UAVレーザ測量（扇精光コンサルタンツ(株)）

【要約】 3次元データを得ることを目的とした調査。

第3章 地中レーダ探査（応用地質(株)）

【要約】 後円部墳頂3箇所に埋葬主体部の可能性がある反応が現れる。後円部は四段築成、前方部は二段築成の可能性があると判明。しかし、以上の調査結果について後述する野澤氏は慎重な姿勢をとっている。

第4章 考察（野澤）

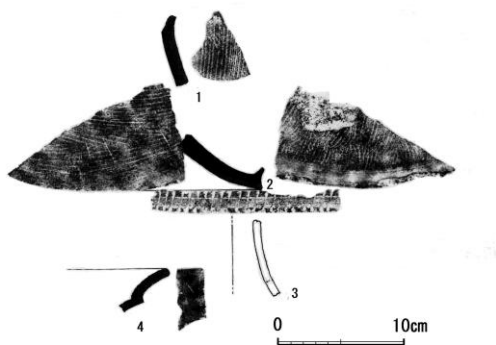
1 守山大塚古墳の基本情報

（1）守山大塚古墳の調査履歴について

【要約】

- ・1952（昭和27）年 後円部から箱式石棺が一基出土したが、詳細不明
- ・1966（昭和41）年 島原史学会が隣接する丸塚古墳でトレンチ調査を実施。高坏など出土（第2図）。
- ・1977（昭和52）年 島原工業高校郷土部による測量委調査。
- ・1990（平成2）年 長崎県教委の測量調査
- ・2009～2010（平成21～22）年 雲仙市教による発掘調査

【感想】 同古墳の内部主体の数は不明だが、そのうちのひとつが箱式石棺であることは、きわめて重要である。



第2図 丸塚古墳出土土器（古門2022） 2は肥前型器台と思われる

(2) 守山大塚古墳が立地する地形の詳細

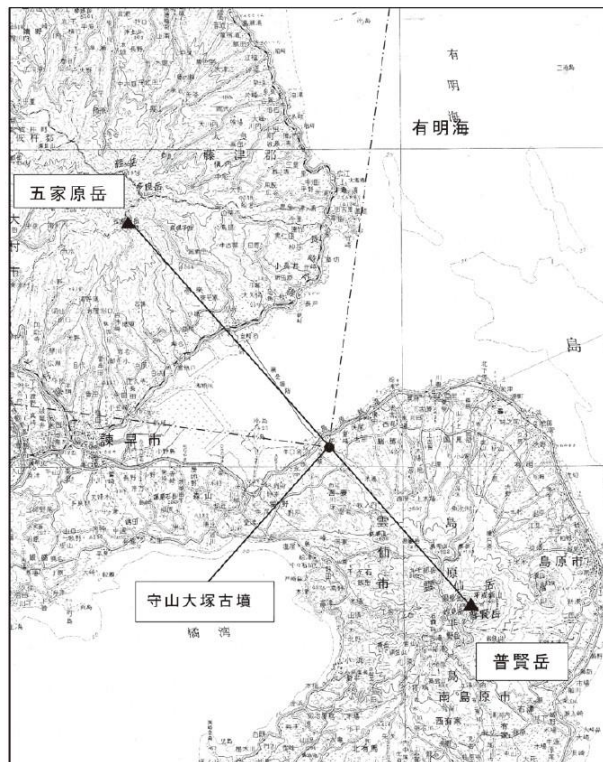
【要約】

1992（平成4）年に刊行された長崎県教委編「県内古墳詳細分布調査報告書」長崎県文化財調査報告書第106集では同古墳が立地する地形を「扇状地」としているが、野澤氏はこれを誤りとし、「田内川が形成した河岸段丘の上に築造した」と訂正している。

その他に、周辺の条里地割、同古墳周溝跡の痕跡、景観などに触れている。

【感想】

筆者が共感し、驚いたのは景観に関する部分である。長くなるが、引用する。「有明海を挟んで多良山系の一つで（守山大塚）古墳周辺から良く見える五家原岳と（同）古墳、そして普賢岳と吾妻岳と（同）古墳とを結ぶとほぼ一直線となる。（第3図）このため西隣のより広い平地（古城）ではなく、田内川の河岸段丘でさらに段丘面の端に古墳があえて立地する理由は、多良岳と雲仙岳、そして有明海を含んだ広い視点における地形の選定基準があり、山・丘や海等の地形と方位を基礎とする思想的背景をもつ選地理念が存在することが考えられる」（同書 p.30）。下図が引用文中の「第3図」であるが、一見して同氏の指摘が理解できる。これは偶然の一致とは見なし難く、海上からの視認性が極めて高いことも含めて野澤氏の見解どおりと考える。



第3図 守山大塚古墳と五家原岳、普賢岳の位置関係（野澤 2025）

(3) 古墳の全長と後円部の比率

(4) これまでの調査で得られた守山大塚古墳の基本情報

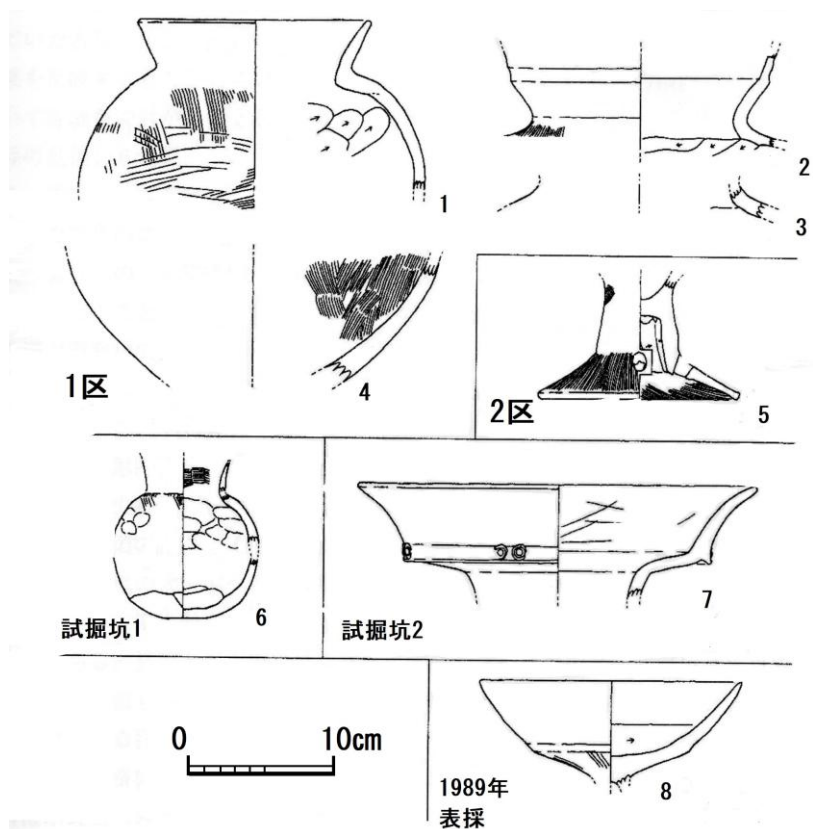
【要約】 今回の非破壊調査で同古墳の規模は全長 70 ㍍以上、後円部直径 51 ㍍、同高さ 8 ㍍、前方部幅 15 ㍍、高さ 2.5 ㍍であることが判明した。

長崎県内で最古かつ最大の前方後円墳である。

同古墳の時期は、以前同古墳より出土した土器が手掛かりとなる。

「出土品は畿内系の二重口縁壺で口縁部に円形浮文を有する破片があり、佐賀地域の土師器編年のタケ里式新相に並行する特徴を持っており、古墳の時期を考えるうえで参考となる。」(同書 p.32)

【感想】 筆者も以前、この畿内系の二重口縁壺(第4図7)を検討し、蒲原氏の同壺の編年の3期(布留1式併行)(蒲原 1989)と見て、さらに同氏の佐賀平野における編年のGⅢb1型式で(蒲原 1991)、タケ里(ゆうがり)式から土師本村(はじめとむら)1式併行と理解している(古門 2022)。



第4図 守山大塚古墳出土土器 (S=1/5) (古門 2022)

2 地下レーダ探査の成果との比較

【要約】 後円部の墳丘基底部ラインが確認されている。さらに後円部西から南側の周溝部が確認されている。また前方部は撥形の形状をなすことが分かった。

3 守山大塚古墳の墳丘について

(1) 長軸方向の断面図分析

(2) 短軸方向の断面図分析

【要約】 詳細は割愛するが、野澤氏により精緻な分析検討が行われている。

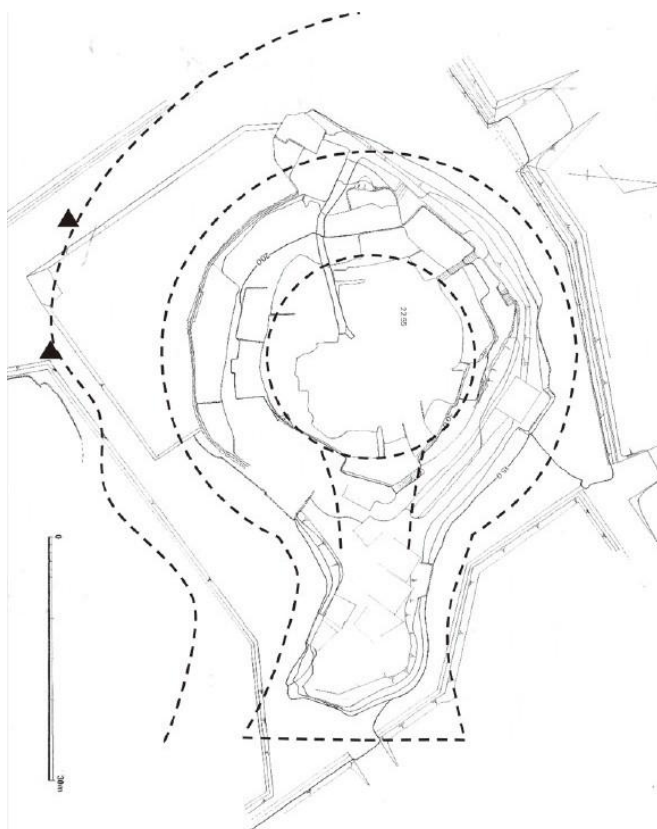
(3) 守山大塚古墳の墳丘復元推定

【内容】

野澤氏が今回の非破壊調査結果から導き出した同古墳の規模は全長 73 ㍍、後円部直径 51 ㍍、同高さ 8 ㍍（通常の 3 階建て建物の高さに相当）、前方部長さ 24 ㍍、高さ 2.5 ㍍である。

また、同古墳は主軸を中心とした場合、左右対称形ではない。

さらに後円部に段築に伴う平坦面があるが、それは前方部にまで廻らない。後円部のテラスは 1 段のみで、周溝は同古墳の南側のみ存在する（第 5 図）。



第 5 図 守山大塚古墳復元図（野澤 2025）

4 那珂八幡古墳との比較

【要約】 那珂八幡古墳は福岡市博多区にある九州最古と言われる前方後円墳である。同古墳に関しては筆者が web 版『福岡市の文化財』から引用した文章を掲載する。「古墳時代初期に築かれた墳長 75 m以上、高さ 8mの規模を持つ前方後円墳である。墳丘は地山整形と盛土でなり、その周囲には鍵穴形に周溝がめぐる。葺石、埴輪はない。内部主体は後円部の中央に 2 基あり、第 1 主体は未調査、第 2 主体は長さ 2.3mの割竹形木棺の直葬で、三角縁神獣鏡と玉類が出土した。福岡平野の首長墓の系譜では最古に属する。」となる。

野澤氏はこの那珂八幡古墳と守山大塚古墳を比較して以下のよう
な分析を行っている。長くなるが引用する。

「守山大塚古墳と那珂八幡古墳とを比較してみる。

○共通点は以下の点である。

①後円部の直径 守山大塚古墳：51m 那珂八幡古墳：51.25 ～ 52.25m

②後円部から前方部への形状

●相違する点は以下の点である。

①前方部の長さ 守山大塚古墳：24m 那珂八幡古墳：34.0 ～ 34.4m

②後円部と前方部との比率 守山大塚古墳 2：1 那珂八幡古墳 8：5

③最も大きな点は、埋葬施設の構造である。守山大塚古墳は箱式石棺が 1 基出土したという伝承があるが、那珂八幡古墳については、2 号主体は木棺墓、しかも割竹形木棺であり、1 号主体は規模の大きい竪穴式の隅丸方形の墓坑である。守山大塚古墳の埋葬主体が箱式石棺であれば、那珂八幡古墳との間には埋葬施設の構造に大きな格差が存在することになり、時期や被葬者の階層差に直結するもので、守山大塚古墳の埋葬施設の具体的な構造に関する検討が望まれる。

④次に大きな違いは、葺石の存在である。那珂八幡古墳には葺石がない。

⑤出土土器の時期は那珂八幡古墳が北部九州ⅠB期≡庄内式 2・3 式であり、守山大塚古墳は畿内系二重口縁壺片により、肥前西部土師器編年Ⅰ期後半（≡タケ里式新相（佐賀土師器編年）≡前方後円墳集成編年Ⅰ期≡北部九州編年ⅡB期）と考えられる。

上記の比較により、守山大塚古墳は九州最古である那珂八幡古墳（墳丘墓）よりも、土器編年で 2 型式ほど新しいことが看取でき、葺石もあり墳丘形態もより畿内的な様相を有している。

しかし、後円部直径は那珂八幡古墳とほぼ同じ数値で、後円部から前方部への接続形状も類似し、守山大塚古墳築造にその墳丘の形態に関する情報等は影響していることが想定される。」

以上が野澤氏の分析検討結果である。

【感想】 野澤氏は守山大塚古墳を前方後円墳集成編年（以下 集成編年）の2期に位置付けている（報告書の第9図参照）。この編年観は従来の編年観と同様である（重藤 2012）。

野澤氏は同古墳から出土した畿内系の二重口縁壺の口縁部片を蒲原氏編年のタケ里式新相、久住編年のⅡB と判断しながら、集成編年1期の那珂八幡古墳との比較から守山大塚古墳を集成編年2期に位置付けたわけである。

一般的に集成編年と土器の関係は集成編年1期が布留0式土器併行、同2期が布留1式土器併行と言われている。一方でタケ里式新相と久住編年ⅡB の下限は布留1式にかかるという見解もあり（檀 2011、中野 2024）、もう少し守山大塚古墳出土土器の数が増えて、まとまらないと同古墳の土器から見た時期の判定はできないのではないかと筆者は考えている。

5 地域における守山大塚古墳の歴史的意義付け

（1）高来郡における歴史的的位置

- 高来郡における集落の動向
- 高来郡における古墳の動向

（2）肥前西部における歴史的な位置づけ

【感想】 上記の項を読む限り、高来郡の各集落の継続期間や墳墓の出現時期などは分かるが、それらを踏まえた郡内の政治勢力の動向がいまひとつ判然としない。今後の課題であろう。

以上が『守山大塚古墳Ⅱ』の概要と筆者の感想である。「はじめに」でも記したが、同報告書はこれまでの守山大塚古墳に関する通説や常識を覆すに足るインパクトをもつものであり、新たな知見をもたらすものであった。

あらためて『守山大塚古墳Ⅱ』の報告書の意義を列記する。

- 長崎県で初めての前方後円墳の本格的な非破壊調査であった。
- 内部主体や段築、葺石、周溝、古墳の規模などが予見できた。
- 同古墳の墳形や規模の復元ができた。本県で最古最大の前方後円墳であることが確定した。
- 従来の同古墳の立地を扇状地から河岸段丘に改めた。
- 同古墳が五家原岳と普賢岳を結ぶ線上に位置することを指摘した。
- 同古墳をあらためて集成編年の2期に位置付けた。

以上が本報告書の意義であるが、同報告書が今後の同古墳の研究の転換点になることは必定である。文末ではあるが同報告書の作成に関わったすべて

の人々の労苦をねぎらいたい。

なお、本稿の執筆にあたり事実誤認や曲解があれば、すべて筆者の責任である。ご容赦願いたい。

文責 古門

【引用・参考文献】

- 雲仙市教委編 2025 『守山大塚古墳Ⅱ』 雲仙市文化財調査報告書第 21 集 雲仙市教育委員会
- 蒲原宏行 1991 「古墳時代初頭前後の土器様相—佐賀平野の場合—」 『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』 16 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館 後に『弥生・古墳時代論叢』 所収 六一書房 2019
- 久住猛男 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」 『庄内式土器研究』 XⅣ 一庄内式併行期の土器生産とその動き— 庄内式土器研究会
- 重藤輝行 2012 「②九州北部」 『古墳時代の考古学 2』 古墳出現と展開の地域相 同成社
- 杉井 健 2018 「弥生時代後期集落の消長よりみた古墳時代前期有力首長墓系譜出現の背景 なぜそこに古墳は築かれたのか」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第 211 集
- 檀 佳克 2011 「土師器の編年①九州」 『古墳時代の考古学 1』 古墳時代の枠組み 同成社
- 中野真澄 2024 「古墳時代開始過程の北部九州における布留系甕の地域性に関する一考察」 『東アジア考古学の新たなる地平: 宮本一夫先生退職記念論文集』 宮本一夫先生退職記念事業会
- 野澤哲朗 2025 「考察」 『守山大塚古墳Ⅱ』 雲仙市文化財調査報告書第 21 集 雲仙市教育委員会
- 橋本達也 2015 「成川式土器と鹿児島古墳時代研究」 『成川式土器って何だ』 一鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器—鹿児島大学総合研究博物館
- 古門雅高 2022 「前方後円墳分布周縁地域の社会」 『西海考古』 第 12 号 西海考古同人会